

炭鉱と原爆をつなぐ

——雑誌『辺境』を視座に

奥 村 華 子

一 はじめに

本稿は、一九七〇年代の「炭鉱」と「原爆」を架橋することで、在日朝鮮人被爆者を問題化しようとするものである。

朝鮮人被爆者が／を語ろうとする際の起点は、なぜ広島や長崎に居合わせなくてはならなかつたかという点に据えられる。朝鮮半島出身者の被害状況は、広島では約五万人が被爆、うち死者は三万人、長崎では約二万人が被爆、うち死者は一万人にのぼり、被爆者の約一割を占める⁽¹⁾。市場淳子がつとに指摘するように、朝鮮人被爆者にとっては、原爆による被害だけが特別に悲惨な体験ではなかつた。植民地統治下での土地收回令等の影響や強制徴用によりやむなく日本へ渡航した朝鮮人にとって、被爆以前にあつたのは広島、長崎で日本人から受けた差別や強制労働

であり、被爆後には補償をめぐる苦難があつた。だからこそ、その語りは被爆以前から始められことが多いのだという⁽²⁾。

そのため、朝鮮人被爆者による語り⁽³⁾や表象は、被爆以前に微用されていた炭鉱の記憶と結びつくことがある⁽⁴⁾。いわば、原爆と炭鉱が併置されることによって、朝鮮人被爆者の負う悲惨な歴史性がより前景化されるのである。

朝鮮人被爆者を描いた表象およびそれを取り上げた研究蓄積には意義の重いものが多くあるものの、いまだ十分とはいえない。黒川伊織の指摘するように、石牟礼道子による「菊とナガサキ」の功績がある一方で、朝鮮人への「差別」の表象と受容が一面化されてきたという問題がある⁽⁵⁾。また、宇野田尚哉の指摘するように、朝鮮人被爆者は「韓国支持か共和国支持かの政治的立場性によって分断される」といった事態もあり、「日本社会の側の差別意識とも相俟つて」不可視化されてきた。朝鮮人被爆者の聞き

取りのようだ、既存の文学の概念からは周縁化されてきた領域を拓いていくことが要請されている。⁽⁶⁾

そのため本稿では、対象領域を拓いていく試みとして、従来「原爆」や「炭鉱」との関わりで取り上げられることのなかつた雑誌『辺境』を対象としてみたい。『辺境』の誌面では、一九七〇年代の「原爆」と「炭鉱」を問題化しようとした記事が散見されることに加えて、在日朝鮮人が在日朝鮮人被爆者に取材し、「原爆」と「炭鉱」を結びつけようとした記事がある。一九七〇年代の閉山期を迎える炭鉱との関わりを視野に入れることにより、当時の在日朝鮮人被爆者が問題化されるなかで、炭鉱という場がどのような目的をもつて描き出されようとするのかを考察する。

二 「辺境」という言説空間——「証言」を記述する

『辺境』は、井上光晴が編集にあたり、一九七〇年から八九年にかけ、三期に分けて断続的に発行された季刊誌である⁽⁷⁾。表紙に「井上光晴責任編集」と銘打たれていることからわかるように、執筆・編集の両面において、井上の積極的参画に立脚した雑誌であった。季刊文芸誌が多数発行されていた当時において⁽⁸⁾、戦後二十四年が経過し、経済発展を遂げる裏面で「風化しつつある根底の線を、なんとかして人間的なものに回復したい」という企図のもと、「小説や批評に限らず文学の土台ができる限り広げていく」ことが提唱されていた⁽⁹⁾。そのため、誌面には井上の作を含む小説や詩が掲載される一方で、石牟礼道子「苦海淨土 第二部」や、亀井トム「狹山事件」などの報告的性格の強い連載も多く、

竹内好はその性質を以下のように表している。

中央と辺境は対立する。相互に相容れない。すなわち、名前だけについていうと、雑誌「辺境」は雑誌「中央公論」や雑誌「中国」とは相互に対立するわけだ。なかなかいい。(中略) 中央あつての辺境であると同時に、辺境あつての中央である。どちらか一方を動かせば他方は当然に動くのだ。⁽¹⁰⁾

自身の関わる『中国』の誌名は失敗だった、という竹内は、誌名としての『辺境』を、同時に誌面のスタンスをあらわすものとして捉えている。また、「辺境レポート」という看板連載において「二つのことば 二つのこころ」(全五回、第七号からは「にはん文化誕生記」を掲載) を執筆した森崎和江は、「『辺境』とい

人気を博していた。

井上光晴という固有名に少なからず依拠した雑誌ではあるが、もちろん誌面では論客各々の問題意識が交錯している。創刊号の編集後記では、「雑誌『辺境』はまさしく、私の中の部落を編集の核におく。もちろんそれは君のなかの部落、読者のなかの村でもあるのだが、(中略) コンクリートの壁にさえ牙をたてる野鼠の群れをふやしたいのだ」と述べられている。発刊前には、井上が当時よく題材とした九州の廃坑地帯に執着するのではなく、「そこから突き出てゆく」ことが必要だとも語つており⁽¹¹⁾、論者各々が核と考える問題がより合わざることで、より広い射程を持つた問題提起の場が構想されていたと見受けられる。

このような方針を象徴するのが「辺境」という誌名であるが、

言葉にこだわる思いはさらさらないが、庶民の体験は、自己に忠実であろうとすれば、いきおい時の中枢のインテオロギーから遠くなってしまうようだ」⁽¹³⁾と表明する。両者においては、一九七〇・八〇年代における商業ジャーナリズムとは異なる形の実践の場であることがあがゆるやかに共有されている。ただし誌面の方針がすべて井上の問題意識に沿うというものではなく、創刊号の編集後記や森崎の言葉が示すように、「辺境」という符号のもとで、各人の関心ある問題が探られていたようだ。このような問題意識が複層する言説空間のなかで、「原爆」と「炭鉱」の関係性から朝鮮人被爆者を取り上げようとした記事を見てみたい。

周知のよう、朝鮮人被爆者が公において問題化され始めるのは、一九六〇年後半からである。一九五二年のサンフランシスコ講和条約発行により旧植民地出身者の法的権利が剥奪され、「外国人」と見なされるようになつて以降、戦後日本社会のナショナリティは、彼ら・彼らを表舞台から退場させた。原爆言説においても同様で、朝鮮人被爆者が「発見」されるのは、一九六四年の韓国原子力院放射線医科学研究所を皮切りに、韓国側によつて在韓被爆者実態調査が行われて以降のことである。この背後には、一九六五年に在韓被爆者の保障項目のない日韓基本条約が締結されたことがある。その後、日本での治療を求めた孫振斗による原爆訴訟によつて、公において朝鮮人被爆者の存在が広く提起されることとなる⁽¹⁴⁾。そして、同時期に日本の戦争加害責任を前景化する機運が高まりつつあつたことを受け⁽¹⁵⁾、日本側からも朝鮮人被爆者を取り上げたルポルタージュや評論が多数刊行され始めた。

この東見初炭鉱での林さんとの体験がどのようなものであつたか。彼は「食事の量が少なく、腹が減つて辛かつた」といふだけで多くを語らないが、炭鉱に強制連行された朝鮮人の

（写真：北井一夫、文：重田雅彦）というルポルタージュが掲載されている。ここでは、忠清南道を訪ね、広島県福島町で被爆した金愛植氏と、その夫で北海道にて爆撃被害で片目を失つた崔聖夏氏一家が取材されている。写真には、畑を耕す様子や住居など生活の一場面のほかに、B-5の誌面いっぱいの顔のクロースアップによつて、憂いと辛苦を湛えた表情が切り取られている。「韓国社会からも阻害されて、貧困と病気の悪循環の中で、苦悩する実態をフィルムに定着させることにより、日本人の歴史的責任を自覚し、植民地支配が再び企てられていることを確認するため」に在韓被爆者をたずねたという重田の文章は、一九六五年に出版された朴慶植『朝鮮人強制連行の記録』（未来社）を参照しつつ、日本との戦争責任を照射し、「本物の平和論」を問おうとする姿勢に支えられ、部落の人々の援助に支えられて生活しているという一家の子どもの目には、「日本人を告発し、侵略政策をみすえる鋭い視線」が見出されている⁽¹⁶⁾。

ここで留意したいのは、写真というきわめて訴求力の強いメディアが提示する、いわば「歴史の証人」の姿が、読者になにを問いかけているのか、重田によつて明確に言語化されている点である。次に、早くから在韓朝鮮人被爆者の問題に取り組んだ平岡敬による記事をみてみよう。

虐待については、私たちの周囲に多くの証言がある。（中略）

彼らは原爆の悲惨を訴えているのではない。日本の植民地

政策、米国の原爆投下、韓国の貧困など、あらゆる国家犯罪

を証言しているのである。とりわけ、彼らの呻きは地底から日本人の退廃した精神構造を照らし出し、日本と日本人の責任を告発しつづける。それこそ私の追求する「ヒロシマ」なのであつた。⁽¹⁷⁾

一九四五年二月より、山口県宇部市の海底炭田東見初炭鉱で従用されていた在韓朝鮮人被爆者の林憲秉氏に取材したものである。東見初炭鉱を含む宇部炭田は、山口県南西部に位置し、臨海地にあるという地理的条件から炭鉱開発が推進された。東見初炭鉱では、一九四二年時点で朝鮮人募集要員二四六人が従事しており、日本人労務係の横暴に対するストライキなども生じていた。⁽¹⁸⁾ 平岡のいうように、強制徴用された朝鮮人にに対する凄惨な仕打ちがあつたことは疑うべくもなく、むろん林氏の寡黙さの背後には言葉にすることのできない辛苦が隠れている。

ただ、ここで取り上げたいのは、平岡が林氏の言葉に歴史的事実を付け加えることで、彼の言葉を歴史的な「証言」として読み解くためのペースペクティブを読者に示していることだ。重田と平岡の両者に共通して、実態をもつた「証人」や、彼らのもたらす「証言」は、「日本人の責任」を追及する言葉として定位されている。

このような手つきを検討するにあたって、成田龍一による指摘が参考になるだろう。成田は、一九七〇年代を「証言の時代」と

し、証言の「正当性」と「真実性」が確認、確立されるなかで、以下のような力学へ注意することを促している。

ここで歴史家が行なつている作業は、固有の経験の固有の記述から、出来事狭義の「事実」を切り取り、それを束ねてひとつの歴史像とする作業であり、人びとの体験／証言／記憶を集合化することによって「客觀化」しようとする嘗みである。それぞれの経験を「証言」として歴史のなかに適切な位置を与え、そのことによって歴史の一コマとする——いわば経験の証言化をするのだが、このことは経験の固有性やそれが当事者にもつ意味の喪失と引き換えではあつた。そして、読者もその結果を追体験していたのである。⁽¹⁹⁾

まず聞き手によつて記述される「証言」は、受け取る側が、証言する側と枠組みを共有していると想定した上で、自らの観点から集約していく。つまり、受け取る側の解釈と評価を経て、歴史記述となる。原爆をめぐる語りにおいても、このような力学が作用しており、「証言」として提示されたテクストは、経験の阻害や疎外、相補や干涉をはらんでいるという。⁽²⁰⁾

流暢な日本語で、「原爆症なのかどうか、はつきりさせたい」とはいうものの、「戦争だったから仕方がない」と諦念を同時に語る在韓朝鮮人被爆者に対し、「そんな日本人がいうようなことをいうのはおかしい。もつと言いたいことがあるのではないか。それを発見するのは朝鮮人であるあんた自身なのだ」と平岡がさらなる批判を引き出そうとすることも、日本の加害性を告発す

るための歴史叙述へ接続しようとする目的性に導かれている。

重田や平岡の姿勢は自身の目的意識から発されている。ただし、在韓被爆者は日本の加害責任を照らし出す他者として峻別されおり、「証言」が恣意的に取捨選択される可能性もあるだろう。とはいっても『辺境』には、ここまで見てきたような「証言」の取り扱いとは位相の異なる記事が掲載されている。次節では、在日朝鮮人朴壽南による「途上の夢」『辺境』(第二次三号、一九七五年)を考察する。

三 「証言」のコラージュ——「半日本人」の表象

朴壽南は、一九三五年日本生まれの在日二世で、東京朝鮮中等学校卒業後、滋賀県の民族学級教師となる。『罪と愛と死と』(一九六三年)『李珍宇全書簡集』(一九七三年)など李珍宇関連の主著や、監督したドキュメンタリー『アリランのうた』オキナワからの証言』(一九九一年)、『沈黙・立ち上がる慰安婦』(二〇一七年)などで知られる。⁽²²⁾ 一九六五年八月に、『太陽』の六五年九月号「在日朝鮮人」特集のために広島に赴いた朴は、在日朝鮮人被爆者に留まらず、その後福岡県筑豊地方や、長崎県崎戸島などで聞き取りを行う。この聞き取りの成果となる『朝鮮・ヒロシマ・半日本人 わたしの旅の記録』(三省堂、一九七三年以下『朝鮮・ヒロシマ・半日本人』と記述する)は、在日朝鮮人被爆者の「証言」を核としながらも、全七章のうち二章は元炭鉱労働者の「証言」から成り、一章は在日朝鮮人一世の経験に主眼が置かれている。⁽²³⁾ 朴は、その動機を次のように語っている。

わたしは振り出しに戻つて、自分がこの国に生まれた意味や、そして自分の根のない存在の意味を、わたし自身が何者であるのかを確かめようとしたのである。そしてこの試みをわたしは、わたしを生んだ父や母たちの語られることもなく埋めている、その歴史と現実の中に探し当てようとしたのだけつた。⁽²⁴⁾

タイトルに冠するように、「朝鮮人宣言」と名付けられているわたしたちの自己宣言は、「半日本人宣言」である⁽²⁵⁾と、述べる朴は、在日朝鮮人二世として自身がなぜいま日本に佇んでいるのか、というルーツを辿る行為として、被爆朝鮮人を含む在日朝鮮人に聞き取りを行つた。日本生まれで、あることに強く執着したという朴は、自身を、日本社会にも二つに分断された祖国にも容易に帰属しえない「半日本人」と自己規定する。「わたしたちの自我は、この日本人の世界の辺境と、自分が生まれた世界の限界線上に、引き裂かれて宙吊りにされたまま、血を流し続ける」と述べるように、前節の『辺境』と接続させる形で言い直せば、彼女の問題意識のなかの「辺境」は、ほかならない自身を含む在日朝鮮人たちの境遇だった。

手法としては、『朝鮮・ヒロシマ・半日本人』で献辞を述べているように、平岡に学んだところが多いと思われる。聞き手の側の立ち位置によって再構成されようとする歴史に差はあるものの、在日朝鮮人らの聞き取りを集合し、自らを含む在日朝鮮人の「証言」を歴史のなかに位置付けようすることは、平岡と同様

の「証言」の歴史化、客觀化であると言えるだろう。

一方で、朴による聞き取りは、在日朝鮮人二世によって在日朝鮮人の被爆経験を取り上げようとする点がやはり際立っている。二年後、これらの「証言」をもとに朴壽南は、『辺境』(第二次三号、一九七五年)に「途上の夢」という記事を発表する。そこでは、上記のような「証言」の聞き取りを記述することは大きく異なる手法が取られている。「途上の夢」から、彼女がなにを描き出そうとしているのか、検討してみたい。

ひとつの街、生きながらにして埋葬されていた死者たちのみやこ、ヒロシマの〈戦後〉をもつともよく象徴していた〈原爆スラム〉が光りに吸収される影のように、消えようとしていた。

此處もまた、ほどなく、美しい対岸のように、季節の花々と緑の樹木に覆われ、恋びとたちと、観光客のための森が造られいくのだろう——(中略)
わたしもまた、狂い損ない、死に損なつたわたし自身の暗黒の淵へ降りて行く——(中略)……

うちの人は：気が狂うておるから、酒呑むのんか、酒呑むから、氣い狂いよるんか。……

……炭坑のタコ部屋いうところは……氣イ狂うところじやろか……(ピカドン)より怖ろしいと……いまに、夢でうなされんじやけえ……(中略)

おぼろな、幻影のようにしかものが見えない、という、半失明の眼で、わたしを凝つと見つめるようにした李ねえさんは、いま、どこに居るのだろうか？⁽²⁷⁾

前の引用部は、冒頭のものだ。「途上の夢」は、『朝鮮・ヒロシマ・半日本人』で聞き取つたいくつかのエピソードによつて構成されている。「李ねえさん」とは、一九六六年に聞き取りのために居留させてもらつていた李家の玉順氏のことと思われる。基町再開発事業の開始によつて相生通りが変質していくなか⁽²⁸⁾、李玉順氏の消息は一時不明となつてゐた。朴は、無くなろうとする原爆スラムを訪れ、今ここには存在しない「李ねえさん」がかつて語つたという夫の炭鉱での徴用の経験を想起する。

これまでの「証言」の記述とは異なり、ここでは「李ねえさん」やその夫の名前もきちんと出てこない。また、朴の語りと「李ねえさん」がかつて語つた「証言」との境界はあいまいで、「李ねえさん」の「証言」の回想に導かれながら、朴自身の言葉が続き、さらには、別の人物による「証言」とつなぎ合わされていく。

……飢えも恥、生きるも恥、哀号！死に損なつたばかりに、こんな、生き恥、曝すのじやけえ……哀、あのとき目の前で、屋根から墜ちて炎えた夫のよう、私も火柱になつて、燃え尽きていたら！
哀！苦生よ、苦生よ、生きるのが苦生よ……(中略)
髪が炎え、肉と血が灼け、死を通過して、生き残つたはる

めは、二十年ぶりに、あの日の体験を再現しながら、わたしの目の前で再び死を体験していた……（中略）

わたしもまた全身で蒼ざめ、戦慄に慄きながら、はるめが再びの死を媒介にして喚び起こしてくれた、のつペラぼうの死者たちの映像（イメージ）を視、断末魔の微かな呻吟や助けをもとめる幽鬼の群れのかばそい声を聴くのだった。（中略）

燃えさかる火焰のさなかを死に向かって行進していた群れの中に、はるめの息子や娘たち、その子らが、そして、自分の名前さえ剥ぎ奪っていた、おびただしい朝鮮人が何千か何万人か紛れていった筈なのだった——。〈銃後ヲ守ル、忠良ナル皇國臣民〉として——。

⁽²⁹⁾

記名はないが、内容から、『朝鮮・ヒロシマ・半日本人』に収録されている、上天満町で被爆し、夫や息子、娘を原爆で亡くした石蓮伊氏の「証言」が構成要素となっていることがわかる。朴が「映像（イメージ）を視」るというように、石氏のエピソードは、朴の想像する「のつペラぼうの死者たちの映像（イメージ）」へコラージュされていく。むろんこのような「映像（イメージ）」は、石氏の「証言」との関連性を持たず、証言者の氏名や、生きている人物から直接的に聞き取った「証言」であることが明記されず、聞き手の想像が入り混じる記述のありようは、ともすれば「真実性」を危うくしてしまうだろう。

しかし、ここでは「証言」の持つ「真実性」の価値から、記事の意味を測るのではなく、このようなやり方でしか表せなかつた

ものを問題化してみたいのだ。朴は、ここで石氏の「証言」を聞き取る自身の身体的な反応を前景化させながら、自身の身震いする身体が思い描く「映像（イメージ）」として、「のつペラぼうの死者」を現前化する。「のつペラぼう」の死者とは、死者であるがゆえに、名もなく、「証言」をすることのできない者である。黒川伊織が指摘するように、皇民化政策のもとで日本名を名乗らされていた朝鮮人被爆者らのなかには、朝鮮人であると認識されず日本人の死者として扱われた者がいた⁽³⁰⁾。「かばそい声」は、実態ある語り手を持たず、そのうえ「断末魔の微かな呻吟」に過ぎない以上、「証言」とはなりえない。

このような「証言」以前の声を拾い上げようとする朴の記述は、直接的な因果関係を持たない「証言」同士をつなぎ合させていく。「証言」そのものとは異なる方向性を包含したテクストのなかで次に現れるのが、炭鉱である。

四 一九七〇年代の炭鉱へ——在日朝鮮人の痕跡を付加する

石氏のエピソードの次には、おそらく朴が以前に訪れた筑豊地方と思われる廢坑の描写が続く。

わたしは、はるめが自分の内部の冥府から喚び出してくる、のつペラぼうの死者たちの背後に、こだまするように連なる黒いボタ山と、半死を生きている男たちの影像をみるのだった。（中略）

そして、あちこちの廢坑の跡の坑口に立つとき、わたしは、

地の底に閉じ込められている男たちのざわめき——打ちひしがれた舌打ちや、唸るような苦悶の声、絶望的な叫びや、救いをもとめる、かぼそい声が、風にざわめく、昏い森の声のよう、わたしの耳に鳴るのだつた。⁽³¹⁾

〈原爆スラム〉での映像（イメージ）から、ボタ山と廃坑へと背景が転じる。一九六五年に筑豊地方を訪れた際、かつての炭鉱労働者らに行つた聞き取りの内容は、『朝鮮・ヒロシマ・半日本人』にも収録されている。朴が聞き取る「のつべらぼうの死者たち」とボタ山が喚起する「半死を生きている男たち」の反響は、むろん証言者同士が関わりを持つものではない。たとえば、『朝鮮・ヒロシマ・半日本人』には、一九三九年に福岡県直方市の炭鉱に渡り、その後召集を受けて三日目に広島で被爆した黄今達氏の聞き取りなども収録されているが、「途上の夢」にはあらわれていない。

一九三四年に「証言」をつなぎ合わせていくのは、他ならない朴という聞き手の旅路と、聞き取りを行つた際の朴の記憶である。つまり、「途上の夢」とは、「証言」を客観的に記述した報告記事ではない。『朝鮮・ヒロシマ・半日本人』に収録された「証言」を構成要素としながらも、朴壽南という聞き手の身体的反応などを織り込みつつ複数の在日朝鮮人の「証言」によつて再構成された、一種の詩的言語と言いえるだろう。そして、「証言」の間には、「証言」以前の「苦悶の声」そのものが挿入されている。言いかえれば、朴が行つたのは、生きている者の「証言」の間隙を縫うように、すでに死して言葉を持たない在日朝鮮人らの苦悶の

死の痕跡を、自身の身体を媒介として喚び起こそうとすることと、次には「未明の死の淵のよくな坑口」から、日本語を解さず、「皇國臣民ノ誓詞」をついに口にすることのなかつたという年老いた農夫のエピソードが接続される。「歴史の奈落を彷徨していき、次には「未明の死の淵のよくな坑口」から、日本語を解さず、「皇國臣民ノ誓詞」をついに口にすることのなかつたという年老いた農夫のエピソードが接続される。「歴史の奈落を彷徨していき、次には「未明の死の淵のよくな坑口」から、日本語を解さず、「皇國臣民ノ誓詞」をついに口にすることのなかつたという年老いた農夫のエピソードが接続される。この声は、日本の戦争責任を批判する主体としてのみではなく、苦悶を味わいながらも、いままでに掬いあげられることなく消え去つてしまおうとする声として、描きとられる点に特徴がある。朴は、自身がつなごうとする「証言」とその間の声の主体を、次のように述べる。

　　無名のまま、銘記される墓碑も、死後の身を横たえる墓場もなく、地の下や海の坑底に打ち棄てられている死者たち、
　　（中略）
　　その存在と死をさえ盗み奪られたまま、わたしたちの歴史から阻害されているものたち——それら、紛れもなく、わたしたちの歴史の破片たちは、償われることのないまま、またふたたび歴史から抹殺されようとしていた——⁽³²⁾

　　もちろん「償われることのない」「歴史の破片」とは、被爆者を含む在日朝鮮人らを指している。では、「またふたたび歴史から抹殺されようとしていた」という言葉は何を指しているのだろう。当時の炭鉱の状況から考えてみたい。

　　一九七〇年代の炭鉱は、全国的な閉山期を迎えていた。多くの

場合、「周辺地域の石炭鉱業の終閉山にあたっては、産炭地域への影響をできるだけ少なくするとともに、計画的な地域振興が行われるよう、とくに留意すべきである」とされ、産炭地域内の開発拠点と既成工業地帯との連絡幹線道路網の形成を促進するための道路整備と、産業転換を急速に推進するため、企業を誘致し、関連公共施設などの投資効率を高めるため、大規模団地の造成を充填的に実施することとすることが進められていた⁽³³⁾。朴が訪れた豊州炭鉱のあつた福岡県田川郡川崎町についても、一九六九年の閣議決定「石炭対策について」を受け、多数の失業者が予測される地域について、公共事業の拡大等採炭地域振興諸事業が強化されていた。当該地域の基盤を整えるとともに、失業者に臨時就業の機会を与えることを目的とし、道路新設、改良舗装工事、住宅団地造成工事、などが行われている⁽³⁴⁾。炭鉱の施設群は、閉山と時を同じくして、早急に変容しようとしていた。

記事の冒頭を思い起こせば、朴が初めに紐解いた〈原爆スラム〉も、基町再開発事業によって、「光りに吸収される影のように、消えようとしていた」とある。つまり、ここで朴がつなぎ合わせようとするのは、〈原爆スラム〉から、ボタ山、廃坑と、一九七〇年前後において姿を消そうとするものたちであり、朴はそこに「無名のまま、銘記される墓碑も、死後の身を横たえる墓場もなく、地の下や海の坑底に打ち棄てられている死者たち」の痕跡を見出そうとするのである。

実は、朴の記事が掲載されている『辺境』第二次第三号には、井上光晴の「クレバスの中の政治と文学」という、閉山によって離職する炭鉱労働者のエピソードを取り上げた評論がある。評論

全体は、佐世保エンタープライズ寄港阻止闘争などを材に、井上の文学的姿勢を表現しようとするもので、そのなかで、廃坑の共同浴場にあつたという、寄り合うような書き付けがそのまま引用されている。労働者らの名前とともに丁寧に書かれた「田舎に帰る」「みなさんいつまでも忘れないで下さいよ」「操炭七年の腕を今後は配達に生かす」などの言葉を前に、閉山をどのように言葉をもつて描きうるのか、という問い合わせが、ここでは井上によつてなされている。

同一号に掲載された朴と井上の記事は、一九七〇年代の炭鉱閉山問題をめぐつて、ある種のパラレルを描いているようと思われる。井上が行うのは、一九七〇年代現在において炭鉱を去る者たちの言葉を書き写すことだった。「みなさんいつまでも忘れないで下さいよ」という労働者仲間に向けられつつも、井上によって『辺境』という媒体に移されることで、急速なエネルギー転換を迎えた日本社会への言葉ともなる。そこがやがて無人の廃墟となり、忘却されたことすら忘却されてしまふことが予想される消えゆく炭鉱であるからこそ、井上は炭鉱労働者らの言葉を前に、文學によって何を表現しうるのか、という問い合わせに行き着くのである。一方で、朴が行うのは、一九四五年以前の炭鉱に存在した、かつての朝鮮人労働者の「証言」と「証言」に至ることのない声を、同様に書き取ろうとしたことだった。自身の名前とともに、「証言」を語る人々だけでなく、その「証言」と「証言」をつなぐ間に、施設群の撤去とともに想起されることもなくなってしまう、ありえたかもしれない人々の痕跡を、現在の時制につなぎとめようとする。それは、「真実性」によって担保される「証言」の記

述とは異なる詩的言語のコーラージュによつてしか、提示されえないものだつた。

五 むすびにかえて

本稿では、雑誌『辺境』の言説空間を確認したうえで、朴壽南の営みの内包する批評性を、同時代の炭鉱をめぐる社会情勢や同誌の井上との比較を通じて、浮き彫りにしようととするものである。

雑誌『辺境』では、論者各自の問題意識が模索されるなかで、炭鉱と原爆を扱つた記事が散見される。そのなかでも、朴壽南「途上の夢」は、かつて自身の行つた聞き取りの旅路を追いながら、自身の身体が喚起する、直接的つながりのない「証言」同士をよりあわせ、「一九七〇年代において消え去ろうとする（原爆スラム）から、ボタ山・廢坑をつなぎ、朝鮮人被爆者と微用朝鮮人の姿在日朝鮮人」という共同体の痕跡を書き加えようとしていた。

高榮蘭が指摘するように、在韓被爆者と在日朝鮮人被爆者が可視化される過程には、日本と韓国の両政府の思惑が重なりあう形で、北朝鮮を排除した上で、日本の内部にいた在日朝鮮人の消去に加担しながら、朝鮮半島の被爆者の存在（＝韓国）を強く可視化させうるような偏りがあつた⁽³⁶⁾。このことを考慮すれば、朴による試みの意義は大きいと言えるだろう。その上で、ほかならない在日朝鮮人二世である朴壽南が在日朝鮮人被爆者の聞き取りを行なつたことで意識化された領域であることを、改めて確認しておきたい。「途上の夢」に、次のような言葉がある。

わたしは、何処から来たのだろう？ しいていえば、この問い合わせるのだが、どうしても抜けない身体の感覚がある。朝鮮半島と日本列島のあわいにでもいるかのような浮遊感」と述べ、多くの二世が、自身の主体性の所在を模索したこと述べている⁽³⁸⁾。朴においては、父母の語られることのなかつた歴史や、今日日本に暮らす在日朝鮮人らの「証言」にとどまらず、日本という地で命を落とすことになつた朝鮮人らの言葉をも探り当てようとしたのである。この点に関しては、「一九六〇～七〇年代の原爆文学をめぐる言説と在日朝鮮人をめぐる言説の交錯をより精査したうえで、さらなる考察が要されるが、それは展望とかえたい。

「炭鉱と原爆の記憶」という視点は、「一九七〇年代の炭鉱と、朝鮮人被爆者の接点を照らし出している。清新なテーマによる発表の機会をいたいだしたこと、質疑の場で多くのご教示をいたいことに、この場を借りて改めてお礼を申し上げたい。

注

1 広島市・長崎市原爆災害誌編集委員会編『広島・長崎の原爆災害』岩波書店、一九七九年、三五七頁。また、被爆時に広島・長崎にいた人々の実態については、①住民登録されていた定住者とその家族

（勤労者・学徒・家事従事者など）②一九三九年以降に動員された労務者とその家族（家事従事者・学徒など）③軍人・軍属に大別されるという（参照は、黒川伊織「被爆体験記に描かれた朝鮮人被爆者の姿」『原爆文学研究』十四号、二〇一五年、二五三～二五四頁）。

2 市場淳子『ヒロシマを持ちかえった人々』凱風社、二〇〇〇年、一一五頁。

3 一例ではあるが、炭鉱での徴用後に被爆したとの証言には、以下のようなものがある。①黄今達／慶尚南道疾川郡出身。一九三九年、「募集」により福岡県直方市の炭鉱へ。坑内労働の苦しさから逃亡。

東京から山口へ移ったのち、召集令状を受け応召三日目に広島市陸軍東練兵場にて被爆（朴壽南『朝鮮・ヒロシマ・半日本人』三省堂、一九七三年）。②李永淳／慶尚北道金泉郡農所面鳳谷洞出身。一九四〇年、強制徴用により山口県萩森炭鉱へ。一九四三年に落盤事故により親指を失い坑内労働が難しくなったため、石炭の荷揚げ業を紹介され転居、広島市牛田町にて被爆（広島県朝鮮人被爆者協議会『白いチヨゴリの被爆者』労働旬報社、一九七九年）。③史又星／慶尚南道昌原郡昌原面中洞里出身。一九二八年、福島県常磐炭鉱へ。その後炭鉱を転々とした後、長崎市にて造船所作りなどをを行う。西泊の海岸埋め立て工事に従事するなかで被爆（長崎在日朝鮮人の人権を守る会編集・発行『原爆と朝鮮人 第四集』一九八六年）。

林憲俊／忠清南道歎次郡東面龍洞里四出身。一九四〇年日鉄鉱業株式会社の「募集」により、長崎県矢岳炭鉱（北松浦郡）へ。矢岳炭鉱が廃坑となり、炭鉱を転々とした後、防空壕掘りに従事するなかで被爆（長崎在日朝鮮人の人権を守る会『朝鮮人被爆者 ナガサキからの証言』社会評論社、一九八九年）。

4 炭鉱と原爆の関わりについては、楠田剛士「炭鉱」（『原爆』）を読む文化事典』川口隆行編、青弓社、二〇一七年、三三一～三三五頁）に詳しく述べ、中沢啓治『はだしのゲン』（全十巻、汐文社、一九七五～八七年）や、韓水山『軍艦島』（川村湊監訳、作品社、二〇〇九年）において、植民地支配の問題が提出されていることが指摘されている。

5 黒川伊織、注1と同掲書、二五一～二六三頁。なお、併せて「朝鮮人被爆者を／が語る」（川口隆行編、注4と同掲書、一六三～一六七頁）を参照した。

6 宇野田尚哉「原爆文学と朝鮮人被爆者・在韓被爆者・御庄博実の詩業を中心に」『グローバル日本研究 クラスター報告書』一、二〇一八年、二一頁（ただし閲覧は以下による。二〇一八年九月一七日最終閲覧：<https://library.osaka-u.ac.jp/repos/okazaki/68946/>）。

7 『辺境』の基本情報は以下の通り。〈第一次〉一九七〇年六月～一九七三年三月、全十号。ほぼ季刊のペースで刊行された。一号の価格は六五〇円で二号からは七〇〇円、七号からは七五〇円。〈第二次〉一九七三年十月～一九七六年五月、全四号。年一号のペースで刊行された。一号の価格は六九〇円で、二号、三号は七〇〇円、四号は七五〇円。〈第三次〉一九八六年十月～一九八九年七月、全十号。再びほぼ季刊のペースでの刊行で、十号以降は休刊扱いとなっている。定価は、一五〇〇円。発行部数がわかっているのは〈第三次〉のみで、五千部ほどと報告されている。参照は、『辺境』全号および茶園梨加「辺境（第一次・第三次）・『兄弟』総目次と解題」（『辺境』八号、花書院、二〇一二年）、発行部数については『新聞総かたろぐ 一九八七年版』（メディア・リサーチセンター、一九八七年）。

- 全号目次の詳細などについては、茶園による整理を参照されたい。
- 8 小笠原克「辺境」『日本近代文学大事典 第五卷 新聞・雑誌』日本近代文学館編、講談社、四〇〇頁。
- 9 「座談会 季刊文芸誌の三年間」『文学的立場』八号、一九六九年、一二二頁。司会は、小田切秀雄により、出席者は、井上光晴、柴田翔、西田勝、渡辺澄子、古林尚、真繼伸彦、和泉あき、伊藤成彦。
- 『辺境』・『人間として』・『文学的立場』の関係者により、おおよその見解において共通するのが、現行の文壇における小川国夫や古井由吉といった「内向の世代」には、現実に対する想像力が不足している、という批判意識である。
- 10 井上光晴「編集後記」『辺境』第一次一号、一九七〇年、二八八頁。
- 11 井上光晴「文学の洗い直し」を創刊のことばは小説で」『東京新聞』(夕刊) 一九七〇年五月二〇日付。
- 12 竹内好「わが辺境観」『辺境』第一次一号、一九七〇年、一二一頁。
- 13 「二つのことば」二つのことば 活字の前・活字の後」『辺境』第一次三号、一九七一年、一四二頁。
- 14 川口隆行『原爆文学という問題領域』創言社、二〇〇八年、七一七三頁。
- 15 黒川伊織、注1と同掲書、二六一頁。
- 16 重田雅彦「微用被爆者」『辺境』第一次三号、一九七一年、一三一頁。
- 17 平岡敬「苦いスチエビ 韓国の微用被爆者」『辺境』第一次三号、一九七一年、一五二～一五四頁。
- 18 李修京、湯野優子「宇部の長生炭鉱と戦時中の朝鮮人労働者」『東京学芸大学紀要人文社会科学 I』五九号、二〇〇八年、一〇五～一一九頁。
- 19 成田龍一『戦争経験の戦後史』岩波書店、二〇一〇年、二四一頁。
- 20 成田龍一「証言」の力学－「原爆文学」の一九七〇年代』『原爆文学研究』十四号、二〇一五年、二八三～二九六頁。
- 21 平岡敬「韓国の原爆被災者を訪ねて」『世界』二四五号、一九六六年、二三三頁。
- 22 朴寿南『朝鮮・ヒロシマ・半日本人 新版』(三省堂、一九八三年)のほか、朴寿南の公式 web (<http://nutigafu.wixsite.com/park-soonam>) の紹介を参照した。
- 23 聞き取りの期間については、一九六四年十一月・大阪生野区猪飼野、岸和田。(時期不明)、一九六五年八月・広島。一九六五年九月十一月・筑豊地方。一九六五年九月・対島。一九六五年十二月・大村収容所、長崎、崎戸島。一九六六年二～四月・下関、宇部、広島。一九六六年四～六月・広島。一九六七年六～八月、十月・広島。一九六九年六～七月・広島。『朝鮮・ヒロシマ・半日本人』に収録された内容は、修正と「韓国の被爆者たち」などの加筆後、「もうひとつヒロシマ・朝鮮人韓国人被爆者の証言』(皓星社、一九八二年)として出版され、この際に削除された「半日本人・被爆三世たち」が読者の要望によって再度収録される形で『新版 朝鮮・ヒロシマ・半日本人』(三省堂、一九八三年)が出版されている。また、初版の献辞には、上野英信夫妻、森崎和江、平岡敬の名があり、新版には丸木位里・俊夫妻が加わっている。
- 24 朴壽南「在日朝鮮人のこころ」『展望』百三号、一九六七年、一七一頁。
- 25 朴壽南「朝鮮・ヒロシマ・半日本人 わたしの旅の記録』三省堂、一九七三年、三六八頁。

27 26 朴壽南、注25と同掲書、一四一頁。
朴壽南「途上の夢」『辺境』第二次三号、一九七五年、三三一～三五

頁。

28

相生通りとは、約一・五キロメートルに及び旧・太田川河川提塘敷沿いに並んだ不法住居群が織りなす路地の存在を指している。被爆後すぐから住居が建てられ、一九六〇年頃には約九〇〇戸の木造

バラック住居が密集していた。一九六九年の基町再開発事業の開始をもつて、九年間にわたり不法住宅の除却が執行され、バラック住居が並んだこの路地は河岸緑地へと姿を変える。河川東側には再開発事業の核となる基町高層アパートが建設され、「平和都市」広島のなかに、『新たなる都市』が作り上げられることとなる（参照は、仙波希望「『平和都市』の『原爆スラム』『日本都市社会学会年報』二〇一六巻三四号、二〇一六年、一二二四～一四二頁）。

29 朴壽南、注27と同掲書、三七頁。

30 黒川伊織、注1と同掲書、二五四頁。

31 朴壽南、注27と同掲書、三八～三九頁。

32 朴壽南、注27と同掲書、四二頁。

33 32 31 30 29 「昭和四三年十二月二十六日 産炭地域振興審議会建議」『炭鉱離

職者対策十年史』労務省職業安定局失業対策部編、日刊労働通信社、

一九七一年、四三四～四四四頁。

34 川崎町史編纂委員会『川崎町史 下巻』川崎町、二〇〇一年、一五七～一五八頁。

35 井上光晴「クレバスの中の政治と文学」『辺境』第二次三号、一九七五年、一六頁。

36 高榮蘭「原爆をめぐる想像力の枠組み」『原爆文学研究』十四号、

38 37 二〇一五年、二七四頁。
朴壽南、注27と同掲書、四七頁。
李順愛『二世の起源と「戦後思想』平凡社、二〇〇〇年、一〇一～一五三頁。

二〇一五年、二七四頁。

李順愛、注27と同掲書、四七頁。

李順愛『二世の起源と「戦後思想』平凡社、二〇〇〇年、一〇一～一五三頁。